

通信 おなこ

37

発行・岩手県北上市和賀町長沼5-343-3・麗捨・山原麗子

米

青木さん。三十二年の年に、あそこナ。

低い所（開墾地）に、あつたから、発動機で、タンタンタンタンと、水揚げてネ、お金を百万円借りてサ。五町歩、田作せえた。

開墾地に低い土地あつたから、十二、三人たつたナ。

奥さん。下の方の人たち……。

青木さん。成功するか、すねえか五町歩やってみたわけだ。そうしたら、そのねえ。案外、米取れるわけよなあ……。

奥さん。そうだったねえ。

青木さん。初めてやったんだけどネ、七俵も八俵も取れる。ニリン、ええと、なつたわけサ。

当時、そのねえ、県でも困てるネ、開拓地さ、田んぼを作るっていう計画は、ねえか、たわけた。そういう指導も、振興計画もねえわけだ。そうしていたところがねえ、ちようと、飯豊川

改修になつたわけだ。今まで、川から水が行く堰
があつて、そこから水揚げしたんだけど、改修し
てしまったら、水揚げられなくなつた。

五町先の田死んですむわけだ。それで、「わか
わっ、しっごいで、隘で相談して、今度、単身、
「農林省」に乗り込んだわけだ。俺、一人だ。

ちようど、その時ねえ、岩手県出身で、民社党
推薦で衆議院で、立候補したことがある人が、南拓
有連盟の全国委員長で、東京滞任したからネ。

その人をたよつて行つてサ、農林省に行つたのサ。
南拓地に田を作るつていう、なにものもねえで
シヨ。そえて畑さネ、畑さ水を揚げるとネ、畑地
灌漑というごいで、補助金をもらつたの。

三十二年、三十三年に、水田、二十何町歩作つ
たの。それが、岩手県の前、南拓地に田んぼを作
つた、一番、最初なわけだ。

奥さん。南拓地にネ。

青木さん。そしてネ、三十三年の年に、初めて

国でネ、南拓地さ田んぼ作るの世話するといふ、
制度が出来たわけサ。

この南拓地では、それより一年早いから、畑
地灌漑で水揚げしたんだけどネ。最初は、田んぼを
作る制度資金がないから、畑地灌漑の基礎工事で
金を借りた。畑地灌漑たども、クロー（畦）づけれ
ば、田になるんだをなあ……（笑）

クロー（畦）畑から、米、取れるんだをなあ（笑）

奥さん。そうたつたね。最初ね、たいた、えか
つたから……。

青木さん。ハツニシキつていう、品種あつて、南
田に強えたよ。とつてる、ヒカ、ヒカす、米、
取れて、あもしエかつたなあ……。

奥さん。あもしエかつたね。

人カ

青木さん。それから、その……南田
チームすの始まつたの。

この南田、全部、人カでたな。

曳かるる牛——高橋ふさ

わかうちとうねりとなりて寄せくるは女の自立かかげたる詩
友の死にあひたる夜の浴槽におもちやの籠はひたすら泳ぐ

対岸の山に三戸の家ありて赤き吊橋かけたりといふ

九十の姑とやさかひ涙ぐむ嫁なる人も病む身となりて

衣裳送り革やぐ室に娘とゐたりわれの時代になかりしものを

この林に枯枝拾ひし日のありき倒れ枯ち木にゆふべ風吹く

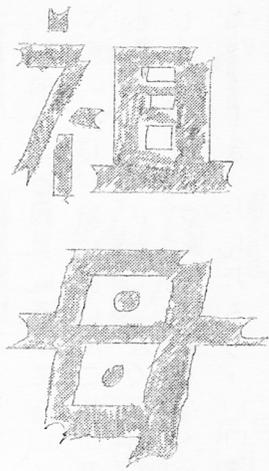
しばれたる朝の市場に曳く人も曳かるる牛もみな息白き

電光板に表示されつつ次々に曳かるる牛より湯気立つ見えて

牛売りし畜舎のなかに幾日も食ひ残したる飼料桶あり

何代か家守り来し太き杉いま伐られつつ軋むその音

たるいの里——ふさの歌・6



高橋

「堀田かよ子しになつた、かやは本当に美人であつた。あの頃が、一番の売れっこといふあたりたつたらうか。」

そして、何年かするうちに、青い背広の背の高し、色黒の若い青年をつれて帰つてきた。

二人で、検校に来て、父の作った大きな「さるのこしかけ」のたばこぼんが気に入り、あとで貰うことにして、山一つ越えて、秋田がわの伯父の家へ帰つて行つた。その頃はもう、親もいなくなつたらうか。

伯父の家も、子供が多く、なかなか生活も苦しいようだったが、一週間か、十日休みのたつたらうか。

さるのこしかけて作つた、「たばこぼん」は、私が持つて使に行つた。小學校四年、五年生の頃、たつたと思う。私が言つて行くと、暗い家の仲から、ひくい門口を、かかみこむように並んで出て来た。かやは、大喜びで、田舎のくらしは、たいくつたつたのたう、送ると言つてついで来た。

二人は、東京弁で何やらペラペラ話しながら歩いて来たかと思つと、子供かと思つたのたうか、「さきヤツ、さきヤツ」言いなから、つねたり、つねられたり、押したり押されたり、田舎の女の子の私には、たつた、おどろくばかり、「ここ、いいよ」と、山の入口まで来て言つと、夕ぐれに光りの中に、青々とした空色の背広と、ハデな着物の袂が、いつまでも手をひいて来た。

家に帰つた時は、別の男の人で、いつも違つた男の人といたぶらつたと伯父が言つていたという。しかし、家につれて来た人は、その人だけで、いつも一人で来た。

たらちね
垂乳根

里使り

まつを媪・問書

13

30 三浦糸港

先頃、大変なことをしたあや。

廊下で、うんこ落としたんだ、オレ。

それも知らねて、オレ踏んだッ、そのスリッパ
見じられて……。

全然、自覚もねえのに、失禁したッ……このわ
たしか、こういう向違いを犯したんだッなんだッ。

九十六(歳)の今まで、お膳汚したこともねえ
し、おしっこもろしたッこともねえの、一番のア
ライドにして来たのに……。

「お首根田さん、ハンツ履けしッか、紐コ解け

たり、下ろしたりが面倒なもナ。

しゅねからへしようがなにかうんこモッコふん
し指で履いたッ、二日やうてハ、取ってふん扱
けたッ。身したる物(あのような物)、とオ
も、やってられね。

「モッコふんどししてマ、

さしてモッコして何たへ?」(笑い)

昔、恐ろしいもの、「モッコ来たッ」って言った
タから……「モッコふんどしして、男たちの代物
を、さっばど包んでしむから、さう言ったんてあ
んめか?、へてはないか」(笑い)

オレ、廊下で落としたッの信じられねヤ。

ナニ、にゃんこ(猫)のタペラて、さうは思っ
ても、にゃんこに、かつける(罪をなすりつける
)訳にもいかねし……(笑い)

死んだ方良いと思っただ位ギヤネがったへ情けな
かった……。

ンでも、下手なこと言って、家の人達の感情害
すのも悪いし……さうたッから、さうたッ
ことにして、「これから、ホロ、ふんどし用に集

めるして言ったキヤ、ヤーヤーと集まってきた。
 矢禁したて言われてナア……すっかりかかり
 したチャー。

「パンツ、何して履かぬかマ、て。

「パンツ下ろすの、ひでダラへひでいじよ。」

「オラ、ペロンと腰巻き、まぐり上げて垂れた方
 良い。パンツ、モソグソど下ろしている内にこぼ
 してスマウ……。」

病院行ききのパンツは用意してあるヨ。あそこは、
 口ハでわかぬから……。(笑い)

「一体で(そもそも)オラ、子供時から、本当
 のパンツ履かぬでスまたあ。(笑い)

相手の人パンツ履いでねば、会いたくねッス、
 会わぬくて良いヨ。(笑い)

節籠た夕て、登、腰巻きたったし……。

オラ達から、十年位後の人が洋服になったかの、
 その人達は、サルマタ履いたべ。

先生時代は、袴履いたし、自姓するようになって
 からは、モンパと、サルイはり……。

「サルハして、上かモンパて、膝から下か股引

になつてんの。「さるこ袴して言つたんたか、ま
 りとして、襦袢時に良いんたか。」

婦人会時代など、モンイはりて、オレ、「モン
 へ会長レツ、名取ったタ……。」

袴たべし、モンパたし、サルハたし……オレ、
 パンツ履かぬでスまたもナ(笑い)

この歳して、「パンツ履けレツが嫌なナア。

ふんどし夕て、二回しか我慢できぬかった……。

オレ、自分でわかぬ内失禁したッツ、ああ
 嫌な、嫌な……。

こうなつてみツと、歳取ったら、どんなこと
 も、あ、そうか、そうかと引き受けて、感謝した
 方がいい。何でも良し良しと、みな肯定することヨ。

「そうでないしなんて、理論議つたて始まんね
 ぶナ。」

その上、オラ、九十六(歳)にもなつたも、「
 まあた、生きてますたヨ」と、お申ス談語つてね
 ばねのダラ……。」



マクス タテラタスカ 立回 橋 セイ

朝、学校に出かける孫達に

「ホレ

「ヒラヒラ支度して行けじゃ」

と、うっかり言う

「それ、何語、て、」と、けんちゃん

「おは、あ、ちゃん語」と、私

少し、なまり言葉がわかりかけてきた

お兄ちゃん

「おは、あ……」

「マクス、クテラタスカ」ということは

と聞く

「それは、飯豊語

「ありがとたんちゃ

「まめすくてらたすか

少し振りに会った大人のふに

挨拶する言葉

9 おは、あ、ちゃんこの言葉、大好きだよ

夕方、仕事から帰ってきた

父親に

お兄ちゃん

「まめすくてらたすか

「ありがとたんちゃ」

父親は

「ニヤニヤしながら

「ああ、まめで働いてきた」と言う

小さい頃、喜んで遊んでいた

玩具のテッポウやピストルが

戦争の道具に

似ているから捨てるという

孫達に

「ありがとたんちゃ

「皆んなまめすけえな」



10 重乳根の里候り。私はいつもこのヘージをたのしみにしてあります。

この方の人生を生きる心根の素晴しさになにかいつも謙虚度がありがたいなあと思い、生きるなにかを教えられることに気づきます。

たくみな話術、その語り口の平直な、正直な大地のぬくもりのようなく柄かじみでた音声そのものが好きなのです。それは私が金ヶ崎の生まれからかもしれませんか……。

「おじいちゃん、あっちの国で待ってるな……早く行かなくちゃ……ホても向うの時間は一刹那から、一杯得っても、その位と思わねかしやね。」

素直で醜情で……なんだが泣きたくなるようです。年を経てなおこのような素直な心そのものをもって生きているなんて達人ですね。心があることが人を苦しめることもありますが、このような心をもつて老いを生きるなら、それは老いてはなく、永遠に輝く今です。人間に心を与えてくれた天に、そして神の心になつたものであり、

お、たよ、り

人生の勝利といえるものではないかなあと思い至ります。

「みぞれの日は、私はこれを讀みまして、井上靖のある短文を思い出し、しみじみと子どもというもののよさをふたたび感じましたし、麗屋さんのおあらがなぞしてみずみずしい童心を想い、うれしさと一杯です。

へ見たはみたけど、へあたまのなかのさもちんこの人生の初期にあつてるともというものは、するどく美しくほこり高い存在ですね。

通俗な大人だけが頭をかたくさせて、お金を勘定したり、戦争をはじめたりはかけたことばかりしています。私なども四人の子供を与えられながら子供の人権もないような願つなしの怒り方をしていて、本来ならまさみち君のように伸びたかもしれない芽を、美しい枝になつたかもしれない感受性を、ホキホキと折っている毎日に情ない想いしております。(略)

盛岡市厨川・東野 久美子

■今日の「重乳根の里」便りには、特にも読ませ
てくれました。懸命に働き、懸命に死んでくれる
「まつを唄」の言葉に引きつけられました。こ
の対談は、そこいらの新聞や雑誌に載っているお
傳方、有名なと称する人達の気取った対談など寄
せつけない程の内容の濃さをもっていることです。

「良心」と言うと、手を加えられた言葉だと思
うという認識、純情の哲学者からの素直への哲學
ミミ。年齢に引っぱられたんだが、こゝと答える淡
々とした唄の口調。それをここまで意識できる
老人はめったにおりません。さらに、天地に対し
ても、人間に対しても九十代はこれ……と、断言
してります。凄いです。誰もが長生きをし、それ
なりに体験と経験を積みますが、大抵の人は、そ
れだけで終って思い出訴で停ってしまいます。唄
は、己の人生をきちんと整理し、それを理論とし
てまとめていることです。凄いと云ったのは、こ
のことです。

まつを唄のこの真骨頂は、心と、俳聖芭蕉のそ
れと似ていて、ついつい翁の言葉之思いたし、重
ねながら読み終えたところです。一つの真理にこ

おたより

たわり、そのために苦心、苦勞しながら生き抜い
た人間のもっている言葉には魅力があります。人
を引きつけます。「略」

横浜市保土谷区・原 田 園 治

■「二等乳」まさにこの通り、私共酪農家の悲
哀が通じます。

主人は酪農、へ私はこの二年半、さく乳とせ
ず学校へ行っています。父かその川、ちやな山
の中の私立学校の理事長をしています。しかしこ
の理事長、仕事は毎日草とり、みぞさうじ、仕
事です。校長と理事長とか仕事着で校庭にいる
時、お密桶が彼らに、「校長先生にお目にかかり
たい」とか、「理事長先生はおりでですか」と
かさいて恐縮するのを見るのは、みんなのちよ
としたたのしみです。生徒たちは、小侯さんのこ
とを彼らを、「令所の尊敬する人」と言います。

島根県 江津市 ・ 多 田 忠 子

橋を渡る

X月X日

「それで、ほうしは、どこにいったって、山(ま)にいらしてしまいました。しと、トツちゃんのおじきなほうしは、二頁にすすみます。

ほうしは、山の方に行つてしまいました。

山脈の上に残っている雲、そのはして太陽は、まわつています。男の手は、ランドセルを背負つて歩いていきます。

「このつきかうちよつとおもしろくなります。といつてもおもしろいかわかりませんよしと、またここで読者に呼び掛けています。自分では、おもしろいことを思いついてけるのでしょうか。か、それを人が、おもしろいと思うかどうか。つきの頁をめぐつてのあたのしみということでしよう。

「それで、ほうしは、うしろにせんかいして、かっこうまで、さしてしまいました。しと、意外な展開を見せます。予告の通りです。

「それもいざようちゆうにはいつてつきん

みぞれの

ました。し窓からフルフルとほうしが入つてきます。その窓の向こうに半分見える太陽は、やはりクルクルとまわつています。

トツちゃんは、机に腰掛けています。そこにほうしかフルフルと、近づいてきたのです。

「それで、トツちゃんは、そのとたんほうしをとりました。しまつたく不思議なほうしです。

「そして、ほうしをはなしても、トツちゃんのよこにいました。そして、かえりもついできました。不思議なほうしと並んで帰るトツちゃんは、笑つています。大きな雲が二つ、太陽はクルクルとまわつていきます。

「そして、それからもしよに、あそんでかかよくあそんでくりました。へおわりしと、血面をもつて、トツちゃんのふしきなほうし山の物語は、めでたくおわりました。

外は、すっかり暗くなりました。みなちやんとまさみち君は、わたしにその「物語」をフレセントとして帰つて行きました。もう、お母さんも帰つてけることでしょうか。「みぞれの日」は、これで終つた、たのですが、後日談が来ります。

「つづく」